

氏名(本籍)	金 ^{きむ}	和 ^{ほあ}	経 ^{きよん}	(韓国)
学位の種類	文学博士			
学位記番号	博甲第499号			
学位授与年月日	昭和63年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当			
審査研究科	歴止・人類学研究科			
学位論文題目	韓国説話の形態論的研究			
主査	筑波大学教授	文学博士	北見俊夫	
副査	筑波大学教授	文学博士	宮田登	
副査	筑波大学助教授		小野澤正喜	
副査	筑波大学教授	文学博士	野口鐵郎	
副査	筑波大学教授		小澤俊夫	

論文の要旨

本論文は、韓国説話の構造分析を通じ、分類体系を設定するとともに、説話構成の法則の理論化を企図したものである。本文は、400字詰原稿用紙458枚にまとめあげられている。

全体の構成は5つの章に分けられる。第Ⅰ章の「緒論」では、研究の目的を明確に述べ、説話の分析により分類の問題をも同時に解決しうる形態論的な考察を駆使する姿勢を主張している。ついで、選び抜かれた80余りの説話を事例分析の対象とすること、さらに先行研究成果の検討を、順を追って批判的に叙述回顧し、問題の箇処を浮彫りし、分類の目的を充す試案を作るための前提を整理した。

第Ⅱ章「研究方法論の模索」において、まず第Ⅰ節では、〈形態論的研究の歩み〉と題して、ロシアのV・プロップの『昔話の形態学』(1928年刊)が画期的な業績であったこと、その批判を十分行ったのち、ダンダス、ブレモン、ジェイスン、ポームら、説話研究史上の代表的研究者につき、それぞれ詳細な紹介と批判を兼ねて述べ、そこから著者自身の方法論の確定を模索している。第Ⅱ節において、如上の十分な検討の結果、結局、ダンダスが使ったモチーフームという分析単位を受け容れ、韓国説話のシンタグマティックな構造分析に踏切った。

著者が採用したモチーフーム(motifeme)なる概念は、従来よく使われてきた説話の構成要素としてのモチーフとか機能という概念を包括した、より総体的・統合的な用語として、K・バイクの創案によるものであったが、アメリカの民俗学者、A・ダンダスが本格的に活用したもので

ある。付言するならば、A・トンプソンに代表されるモチーフやV・プロップが使用した機能という分析単位においても受け入れなかった起点状況（initial situation）をも包括させて、説話の構造と展開を分析するものである。また、著者は、分類単位の設定に当っては、類と型、形の3つを使用している。類とは説話の総体的構造、つまり起点状況から始まった物語が、いかなる終点状況にしめくられるかという観点に立つ上位の単位である。型は、モチーフの結び方、例えばそれが単純な因果関係であるか、あるいは対応の関係を重複するか、さもなければ2回以上繰り返すかなどによって区分する中間の単位である。さらに形とは、実際の各々のモチーフの構成体を現わす下位の単位としている。

ともかく、著者は分類単位の設定・研究方法論を模索して分類の基準を自己なりに深化させるに当り、フランスの記号学者、C・ブレモンらの系統を継承している。類や型・形の設定・命名は、主としてフランスの人類学者D・ポームの研究に学ぶところがもっとも多い。

以上のような経緯を経て、第三章では、韓国説話のなかから必要最少限とみられる80余を選び抜き、そのモチーフの分析を通して、類・型・形と分類している。その結果は、つぎのように概述される。

すなわち、韓国説話は、起点状況から始まった物語が、どのような終局状況でしめくられるかという類の立場からみると、4つの類、つまり①改善される上昇類、②悪化される下降類、③これら二者が折衷された折衷類、そして④元の状態に戻ってくる回帰類などである。これら4つの類のうち、量のうえで絶対多数を占めるものは上昇類の説話であり、その進行過程においては、欠乏の起点状況から始まり、それが取り除かれた欠乏の除去で終る一群の物語であるが、その間に、中核的なモチーフといわれ欠乏と欠乏の除去の連鎖によって成り立つところの中核型の説話を始めとして、それらの間に何種類もの型が介在する。それらは、モチーフの様式によって、順行型と反転型、螺旋型、複合型に分類されるとしている。そして、構造とテーマとの関係でこの上昇中核型の説話の特徴として、神話的要素が案外多いことに着目している。

つぎに、上昇順行型では、課題と課題の成就、善業と善果、試練と試練の除去、危機とその除去、欺満と欺満の成功などのモチーフの連続体として語られる。前者がその問題を惹き起こし、後者はそれを解決する構成の法則により成り立っている。これに対し、必然的な要請に応じて手段や方法を案出する脱出の図式モチーフが挿入されて出来上がったものが上昇反転型の説話である。

また、欠乏と欠乏の除去のモチーフが二回ないし三回に亘って繰り返される脱出の試案が用いられるものは、上昇螺旋型とされ、さらに、以上のような、いくつかの説話が互いに合わさって出来上っている上昇複合型の設定が可能であり、この類型は、モチーフの設定がより必然的になって物語文学にいつそう近付いた形をとっていると説いている。

以上の上昇類の説話とは対照的な展開過程をたどる一群の説話が、下降類と名付けてよいものであるとする。そして、これらは上昇類の過程が交換されたものであることに注目している。そして、これら類型の分類を通して、説話それ自体が合理的・論理的に構成されているばかりでなく、その

構造の変換もまことに論理的に行われていることを確認している。

一方、折衷類の説話は、これらとは様相を異にし、構造の変換により成立しているのではなく、構造の融合、つまり、上昇類と下降類との構造が合わせられて出来上っている一群の物語であり、折衷類と命名される所以であることを述べている。下降類説話と同様、悪化される運命を描いた構造になっていて、人間の回避動機を基にして作られた説話と見ている。しかも、折衷喇叭類型の構造は、接近・回避の葛藤に、折衷砂時計類型の構造は二重接近・回避葛藤に基づいたものであるとしている。

さらに、今まで見てきた物語の類型と区別されるもう一つの構造の説話群があり、回帰類と命名している。この類には展開の仕方により、欠乏回帰類型と充足回帰類型とに分類されている。こういう回帰類の説話の構造と折衷砂時計類型の説話の構造とは、かなり類似したところも認められる。しかし、前者が一人の主人公ないしは彼の味方を中心として話の筋が展開されるのに対し、後者は主人公と対立する反主人公をも登場させ、二人の側面から話が展開される点が違うところであると述べている。

以上、第Ⅲ章「構造の分析」の内容紹介を中心に、説話の「構造とテーマ」との不可分の関係、「説話構成の法則」性などにも言及してきたが、その説明内容には、第Ⅳ章「構造分析の意義」で説かれている部分を加味し、からませながら説明してきた。その方が、内容に即し実際的であると考えたからである。

第Ⅴ章では、以上の内容を「結論と展望」としてまとめて叙述し、説話を形成するモチーフームらとそれらによって成立している説話の構造との関係には、人間の、とくに民衆の心意が濾過され、その深層の構造を論理的に法則性に従って構成されていることを確認している。

審 査 の 要 旨

韓国における説話の研究においては、これまで崔仁鶴氏による『韓国昔話の研究』（1976、東京、弘文堂）が一応まとまりをもった成果とされているが、A・トンプソンの分類に基づく段階にとどまるものであるのに対し、金和経氏の本論文は、その後の研究史を十分整理、分析してその長所を撰取し、今日、世界的に多用されているA・ダンダスの構造主義的形態論を基礎に、韓国説話研究に、さらに前進させる成果をもたらしたものとして高く評価される。とくに、欧米の先導業績の分析に優れ、それらの先駆者が設定した枠を越えて、欠乏回帰型・充足回帰型など、韓国説話の特質をよく分析し、提示していることが注目される。

なお、著者に今後望むところは、より多くの事例分析を手がけて検証することと、説話のもつ人類文化との関係や、時代背景との関係を把握するなど、よりいっそう慎重な対処の仕方が必要と考えられる。

以上のような要望も指摘されはするが、韓国説話研究の分野に、大きな前進を成したことは、学

会への寄与として高い評価を与え得るものと判断される。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。